－所蔵作品紹介－

村山　陽一　MURAYAMA Yoichi

祭A

まつりA

作品データはこちら

村山陽一は大正15年函館生まれ。昭和36年旭川で没しています。34歳の短い生涯でした。画家として本格的に活動を始めたのは、戦後の復興期のことであり、またそれは新しい世代の作家たちの台頭期でもありました。昭和21年に結成された北海道アンデパンダン展が若き村山の活躍の舞台となりました。

彼は新しい美の価値の創造を謳ったアンデパンダン展の誠実な使徒であったといえます。戦後、抽象や幻想といった前衛的傾向が強まっていくなかで、村山もまた抽象へと傾斜していきました。幾何学的抽象から濃厚な色彩と自由なフォルムによる抽象表現主義へと作風は変化していきましたが、晩年グワッシュを好んで使うようになり、より透明な表現へと向かっていきました。

「祭Ａ」は、第10回読売アンデパンダン展（昭和33年）の出品作で、村山独特の土俗的エスプリが明快に表現されています。黒いカリグラフィックな曲線はまるでひとつの生命体のように生気を放ち、交錯し、ぶつかりあい破裂する黒と赤との連鎖反応もこの作品の緊張感を高めています。

村山は黒にとりつかれた画家だともいえるでしょう。黒への愛着が透明と混濁、悲嘆とユーモアの間で激しく揺れ動き、彼の造形思考の主旋律を奏でているのです。

旭川美術館だより「氷華」No.16・17合併号（1988.２発行）「収蔵作品から」より